



特集

# 「小5 統一合判」 4

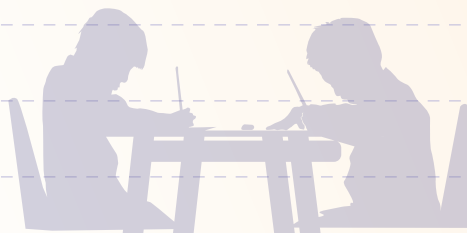
中学入試レポート vol.

## これからの社会に 求められる力とは？

### 私立中高一貫校におけるキャリア 教育と国際教育を考える！

今年も残すところあとわずか！現6年生たちが来春の中学受験に向け、ラストスパートをかけるなか、先輩たちに負けじと、5年生の皆さんも受験勉強に励んでいることでしょう。この小5「統一合判」テストも今回で4回目。保護者の皆さんには、今回のテスト結果を上手に生かし、これからのステップアップに結びつけてほしいと思います。

今回の入試レポートでは、再来年2018年入試でのお子さんの学校選びのために、私立中高一貫校がこれからの社会をどのように想定し、そこで求められる力を育もうとしているのか、「国際（グローバル）教育」と「キャリア教育」の視点からご紹介します。



首都圏模試センター

## 現在の小学生が生きる将来の社会では、65%が今は存在しない職業につき、今ある仕事の47%が消える？

わが子が再来年の春、中学に入学して、中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出る2028年以降、私たち大人が経験していない近未来の社会はどのように変わっているのでしょうか。

アメリカ・ニューヨーク市立大学大学院センターのキャシー・デビッドソン教授は、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」と予測しています。

一方、英国のオックスフォード大学で人工知能などの研究を手がけているマイケル・A・オズボーン氏によると、「今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い」といいます。つまり、AI（人工知能）の急速な進化によって、いまの社会に存在する約半数の職業が機械化される可能性が高いということです。

こうしたAIの進歩により以前から、時代は刻々と変化し、日本にもグローバル化の大きな波が押し寄せようとしています。現在の小学生が社会に出るときには、いま以上に、世界やアジア諸国のなかでも経済的な競争は激しいものになるでしょう。しかも競争だけではなく、世界各国の人々と意思を合わせ、協働・協調、そして共生を図りつつ、グローバルな意識や視点で物事を考え、国家や民族の壁を越えて地球全体に課せられた諸問題を解決していく力が求められる時代となるのです。

いま世界のビジネスの第一線で活躍する保護者のなかには、将来の新たな社会を担う、わが子の世代に求められる力がどのように変化していくのか、すでに実感されている方も多いのではないのでしょうか。

教育が担うものが、個人の幸せと同時に、社会（民



十文字が取り組むD.R.P.では、ディスカッション（価値観の違いを理解する）、ディベート（議論する）、プレゼンテーション（発信する）を教科の枠を超えて学びます。

族や国家、世界）の安定（平和と繁栄）だとすれば、経済や政治など、さまざまな意味で「国境がなくなる」今後の社会では、グローバルに物事を考え、論じ、実現・実行することのできる人材が求められます。

そのためには、当たり前英語で話すことができ、国や民族、文化の違いを越え、互いの意思や主張を尊重しながら理解し合える力が必要になるのです。

環境やエネルギー問題など、今の世界が抱えるさまざまな問題について、自ら問題意識を持ち、調べ、解決する、「クリティカル・シンキング」の力もこれからは必須の力となります。

このような社会で、何か大きな仕事を成し遂げるには、必ず仲間のサポートも必要になります。そのためには、豊かな学力や知識・教養に加え、対話的なコミュニケーションの力、多文化のもとで共生・協調できる力、人々をまとめリードする力を備え、多くの仲間と力を合わせて（コラボレーション）、双発的・相乗的な力（シナジー）を発揮できるような、幅の広い人間力が求められるのです。今後は国境を越えた相互理解の手段として、音楽・芸術・スポーツなどの素養も、大切にされる時代になるでしょう。

また、そうした活動をするときの行動や考え方のベースには、人々の自由な意思（リベラル）や公正さ（フェアネス）、正義（ジャスティス）、寛容（トレランス）などを大切にする精神性や意思の力、行動規範も欠くことのできない要素となります。

このような人間的な総合力は、簡単に身につけられるものではありませんが、だからこそ、人生で最



も多感で吸収力のある中高生の時代に、これらの力の基礎になる学力や人間力を育て、さまざまなことを仲間と一緒に体験できる環境が、私立中高一貫校に期待されるのです。

## もはや“英語の枠”を超えた私立一貫校の国際（グローバル）教育

受験やテスト対策のために、必死に単語カードをめくっていた時代も今は昔。保護者の皆さんの学生時代とは大きく異なり、英語の授業もすっかり様変わりしました。現在、政府は2020年の「大学入試改革」や東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、「グローバル化に対応した英語教育」への転換を急速に進めています。

すでに小学校でも2011年から5・6年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化されました。外国語活動においては、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行うとされています。これらのことから、現在のセンター試験に変わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、ライティングやスピーキングなどの「四技能」を駆使した英語のコミュニケーション能力が試される出題が予想されています。

これに先立ち、すでに多くの私立中高一貫校では、より実践的かつ先進的な英語教育に取り組み、すでに大きな成果を残しています。

たとえば、ほとんどの私立中高一貫校には複数のネイティブの教員が常駐し、オールイングリッシュでの英会話授業を実施するなど“本物の英語”に触れる機会を設けています。なかには、他の教科の授業を英語で行う「イマージョン教育」や、オンライ

ンでフィリピン・セブ島などのネイティブとマンツーマンで英会話ができるシステムを導入する学校もあります。また中学時から「国際」や「グローバル」を冠するコースを設置することで、海外大学への進学や真のグローバル人材の育成を掲げる学校も目立って増加してきました（コラム参照）。

以前から先進的な実践英語の育成に力を入れてきた●横浜富士見丘学園中等教育学校では、本年度よりネイティブ教員の副担任制度を導入しました。朝のホームルームに始まり、昼食、掃除、部活動など、日常的にネイティブ教員と触れ合うことで、英語でコミュニケーションを取る機会が大幅に拡大しているそうです。

留学制度や海外語学研修が充実しているのも私立一貫校の特徴です。◎東京成徳大中学・高等学校では、これまで希望制の学期留学を実施していましたが、2017年度の中学入学生からは全員参加の標準プログラムになります。かなり思いきった英断ですが、これも同校の留学に対する実績とノウハウ、そして、何よりも留学後の生徒の成長に確かな手応えを感じているからに他なりません。

ハード面でも●山協学園の「イングリッシュアイランド」のように、常駐するネイティブと生徒たちが気軽に英会話を楽しめる日本語禁止のスペース（イングリッシュルーム）を設ける学校も増加しています。これも目指す教育にあった設備や環境を自由にカスタマイズできる私学ならではのメリットと言えるでしょう。



CALL教室でのスピーキング練習やオンラインレッスンなど、先進的な英語教育に力を入れる田園調布学園。

## さながらインターナショナルスクール！？ 中学時から国際コースやグローバルコースを設置する私立中高一貫校（※一部抜粋）

### 女子校

- 大妻中野  
グローバルリーダーズクラス
- 神田女学園  
グローバルクラス
- 実践女子学園  
グローバルスタディーズクラス
- 昭和女子大昭和  
グローバル留学コース
- 東京女学館  
国際学級
- 富士見丘  
英語特別コース
- 文化学園大杉並  
難関進学（グローバル）コース
- 山脇学園  
クロスカルチャークラス
- 和洋九段女子  
グローバルクラス（2017年新設）

### 男子校

- 明法  
グローバル・エンデバーズコース

### 共学校

- ◎開智日本橋学園  
グローバル・リーディングクラス
- ◎工学院大学附属  
ハイブリッドインターナショナルクラス
- ◎玉川学園  
IB（国際バカロレア）クラス
- ◎広尾学園  
インターナショナルコース



近年ではタブレット端末を導入する私立中高一貫校が大幅に増加。新たな学びのスタイルには、なくてはならないアイテムとなっています。

- ◎三田国際学園  
インターナショナルクラス
- ◎明星  
グローバルサイエンスクラス
- ◎目白研心  
スーパー・イングリッシュ・クラス（※中3時より）
- ◎安田学園  
特英コース（※中3時より）
- ◎日本大学  
グローバルリーダーズコース
- ◎暁星国際  
インターナショナルコース
- ◎芝浦工業大学柏  
グローバル・サイエンスクラス
- ◎二松學舎柏  
グローバルコース
- ◎秀明  
スーパーイングリッシュコース
- ◎茗溪学園  
グローバルコース

このようななか、中学入試にもグローバル化の波は確実に押し寄せています。これまでも帰国生入試などでは英語入試が行われてきましたが、ここ数年、一般入試に英語を取り入れる学校が急速に増加しています。首都圏では2015年に33校、2016年には64校、そして来春2017年には100校を超える私立中学が何らかの形で英語による入試を実施する予定です。

これまで中学受験の準備はしてこなかったけど、幼少期から英会話にだけは力を入れてきた、という親子もきっと多いはず。この動きはそのような受験生にとっては大きな朗報であると同時に、私立中高一貫校の教育そのものが、これからのグローバル社会を反映していることを知る、ひとつのきっかけになるのではないのでしょうか。

## わが子が「より良く生きる」ための 私学の進路&キャリア教育

もともと義務教育の期間であり、卒業して社会に出るまでに最低限必要とされる学力を身につけるための「学習指導要領」が課せられてきた公立中学校とは違い、私立中高一貫校は、卒業後は高等教育（大学・大学院）につながる、学問・研究の基礎づくりのための「進学準備教育」を行う中等教育（中学・高校）機関として発展してきました。

そのため、高校への進学率が98パーセントまで高まり、さらに大学・短大への進学率が50パーセントを超えた現在であっても、公立中学から公立高校へ進学する既定の公立学校の「完成教育」とは違った「（大学への）進学準備教育」という側面を私立中高



東京女子学園の「ワールド・スタディ」ではデジタルテキストを使用して、ゲーム感覚で世界の文化や環境問題を取り上げます。

一貫校は持っています。

そのために、ほとんどの私立中高一貫校では、大学進学を前提とした教育課程（カリキュラム）、シラバスを組み、高校卒業までの6年間で、大学に進学してからの学問・研究につながる学力の育成や、学習姿勢の下地づくりをめざしているのです。

系列の大学を持たない中高までの「進学校」であれば、生徒が希望する進路に向けて、大学受験をクリアできる力を育てます。そのため、中学入学から大学受験までを見通すことのできる教員が、毎年の大学入試問題にも目を通し、6年間でどこまでの（どのような）学力を身につけさせるかという目標に向け、遡って中1からのカリキュラムを組み立てます。

一方で系列の大学を持ち、大半の卒業生が推薦でその大学への進学ができる「大学付属校」であっても、大学に進学してからの学問・研究に対応できる学力を育てるため、6年間の教育体系を考えています。

また最近では、一部の難関私立大学（慶應義塾大学や早稲田大学など）を除くほとんどの私立大学の付属校が、自校の系列大学にも何割かは推薦で進学でき、同時にそれ以外の大学（医学部をはじめ系列大学にない学部や、系列大学以外の難関国公立大学など）にも受験して合格できる力を育ててくれる、いわゆる「半付属校・半進学校」の中高一貫校となっています。こうしたタイプの学校では、先の「進学校」と「付属校」の両方の意味で、大学に合格、あるいは進学するために必要な学力を生徒に身につけさせ

る教科教育の組み立てを工夫しています。

古くは家政・裁縫などの実学系の学校としてスタートした女子校でも、女性の社会進出の増加にともない、めざす教育のあり方を変化させ、やはり生徒の多くが卒業後は高等教育（大学・大学院）に進学する進学準備を行う学校へと変貌を遂げています。

現在の中学受験生の保護者が中高生だった頃には、すでに多くの私立女子校が、「進学校（あるいは大学付属校）」に様変わりしていました。しかし創立期の家政・裁縫系の女子校だった頃の教育姿勢やイメージが色濃く残る私立中高一貫校（●豊島岡女子学園の「運針」などはその典型）もあるので、そうした女子校の変化にも注目してみてください。

### “相互理解・協調・共生の時代”に必要とされる力を育む

そしていま、学校教育の世界で長年行われてきた「進路指導」という言葉も、「キャリア教育」へ変わりつつあります。つまり時代の変遷とともに、単に卒業後の進路（大学や就職先）を選ぶための指針や相談、アドバイスだけを求めるのではなく、職業見学や職場体験、知識人やOB・OGによる講演会など、将来のヒントや動機づけになる機会が中高の教育に求められるようになったということです。

そうした生徒の進路選択や意識づけのサポートを公立学校に先駆けて実現してきたのが、私立中高一貫校であり、現在の大学進学（合格）実績の圧倒的な優位性も、多くの私立中高一貫校が力を入れてきた、広い意味でのキャリア教育の“副産物”といえるでしょう。

このように私学の教育の成果が目立って伸びてゆく過程で、特に女子の教育に大きな役割を果たしたのが「キャリア教育」でした。

現在では女子の最難関に近い位置まで入試レベル

を高めてきた●鷗友学園女子などは、そうした女子のキャリア教育をいち早く導入して実践してきた先進校です。

それは将来の職業選択と、結婚・出産など女性にとっての人生の節目や、その後の職業復帰なども含めた「キャリアデザイン」を考えさせるものであり、もっと長い目で自分自身の価値観(人生観)や生き方、ライフワーク・バランスを考える「ライフデザイン」教育へと進化しつつあります。

●品川女子学院の「28プロジェクト」、●中村の「30歳のわたし」を考えるキャリアデザイン、◎栄東が中2で「20年後の履歴書」を書かせる「キャリアAL (アクティブラーニング)」、●東京家政大学附属の「ヴァンサンカン (25歳)・プラン」なども、そういう私学の「ライフデザイン教育」の一環で、とくに女性が自身の幸せを感じられる職業選択や生き方を考えるキャリア・デザインのプログラムの典型といえるでしょう。

私立中高一貫校の多くでは、そうした仕掛けが中高6年間の教育に組み込まれ、それが生徒の将来に向けた目標設定や目的意識を育てるうえでの大きな役割を果たしています。同時にそれが、日々の学習に向かうモチベーションを高めるきっかけにもなっているのです。

また、神奈川の●栄光学園や●サレジオ学院をはじめ、多くのカトリック校では、「Men for Others (他者のために生きる)」という共通のスローガンを掲げています。

たとえば志望する大学の合格に向けて努力をするのは、決して自分の(利益の)ためだけではなく、やがて社会に出て「他者に奉仕(貢献)するため」に必要なことだからと考える。そうして将来、他者や社会のために貢献できる力を身につけるための前提として、目の前に大学受験というハードルがあるならば、それをクリアするために全力で努力をする



東京家政大学附属のヴァンサンカン・プランでは、25歳の自分の理想像を思い描き、その実現のために「今何をすべきか」を具体的に考えます(写真はOG講演会)。

使命があるというのが、多くのカトリック校に共通した考え方です。

この先わが子が社会に出る2028年以降のグローバルな社会では、いま以上に多様な文化や価値観を持つ人々との“共生”“協働”の力が求められます。

そうした変化を前提に、ミッション・スクール以外の私学でも、その時代の世界で「より良い社会」をつくる担い手となり、自身も「より良く」生きていける力を育てることを教育の目標に掲げています。つまり、その素地や感覚、視点を中高6年間で育てることが、現在の私立中高一貫校の「キャリア教育」がめざすところなのです。

これは各私立中高一貫校が、生徒の思い描く進路やキャリアを実現するための学力の育成やサポートに力を注いでいるということに他なりません。このように時代の変化や世の中のニーズにも柔軟に対応して、新たな時代に即した教育や学習指導を実践してくれるのも、私立中高一貫校の魅力なのです。

### 男子と女子の成長リズムの違いを考えた 私立中高一貫校の進路&キャリア教育

また私立中高一貫校には、もともと男子校、女子校という「男女別学」教育を行ってきた学校が多かったことは、ご存知の方も多いと思います。

しかし、1980年代後半から現在までの約30年の間に、多くの私立中高が男子校、女子校から「共学化」



しました。現在では、男子校などは希少な存在となっています。

いずれにしても男子と女子とでは、小学生～中学2年生くらいまでは、成長のリズムや精神年齢の発達スピードが異なります。一般的には女子の方が、中学入学の段階で1歳～1歳半くらい精神年齢が高いといわれています。それに応じて、多くの私立中高一貫校では、キャリア教育の導入学年や、学年ごとの仕掛けにさまざまな工夫を凝らしています。

男子の場合には、将来のキャリアや職業選択、進路（大学の学部・学科）を早くから考えさせるよりも、まだ精神年齢の若い中学生の時期には、自律的な学習習慣を身につけることや学力的な下地をしっかりと鍛えることに力を注ぐケースが多くなります。つまり精神的に成長して社会的な視野や問題意識を持てるようになってから、じっくりと将来のキャリアや進路を考えさせるスタイルです。

一方の女子に対しては、男子よりも早い時期（中2くらい）から、時々将来の進路や、自分が希望するライフスタイルなどを考える機会を設け、それを学習の動機づけにもつなげていくようなキャリア教育が主流となっています。現実的、社会的な感覚が育つのが男子よりも早い女子にとっては、早い段階から自身の将来をイメージすることが、目標に向けて着実に努力をする動機づけになるのです。

私学の男子校や女子校では、こうした男女の精神的な成長・発達のリズムに応じて、キャリア教育を導入していくことができるのです。

さらに、男子と女子とをともに受け入れている「男女併学（別学）校」である◎国学院大学久我山中や◎かえつ有明のように、男子と女子では少し違った時期・内容のキャリア教育（それにつながる教育プログラム）を工夫している私学もあります。

共学校では、そのように精神的な発達リズムの異なる男子と女子が同じ環境の中にいることになりま



品川女子学院が取り組む「28プロジェクト」では、女性としての大きな決断をする時期を「28歳」と想定し、生徒自ら考え、決断し、人生を切り拓く力を育むことに力を入れています。

す。そこで共学校では、中学生の時期には成長の早い女子がリードする形で、将来の職業や進路選択のための体験学習に取り組み、高校の高学年になったときには、逆に女子よりも（一般的に）チャレンジ志向が強くラストスパートの馬力もある男子が、大学受験に向けて強気の受験校選択をすることで女子にも良い刺激を与えるなど、互いの特質を生かすような形でキャリア教育や進路選択が行われています。

そうした違いがあるなかで、どのような学校が、わが子の性格に合った、わが子にとっての良いキャリア教育、進学教育をしてくれるのか、多様な私学の教育姿勢、プログラムを保護者がよく調べて選択する必要があります。

こうした進学・キャリア教育のスタイルが、6年間の外国語（英語）教育や海外研修をはじめとしたグローバル教育や各教科の教育プログラムと不可分のものとなっているのは当然のことなのです。今後、希望する進路や職業によっては、海外大学への進学という道も、現在の中高生にとっては、自然の流れとなるでしょう。

このように、私立中高一貫校では、その継続性と時間的なゆとりを生かして、生徒たちの将来に向けた進路・キャリア教育にも時間を割くことができます。

つまり男子校・女子校・共学校いずれのタイプであっても、中学と高校の3年間ずつに分断された公立学校よりも、じっくりと「自分探し」ができる環境といえるのです。

## 将来の社会で求められる力や大学入試制度が変わり、 私立中高一貫校のキャリア教育も変わる！

～日本の教育が大きく変わる節目に、わが子の将来に求められる力(=21世紀型スキル)とは?～

2020年からの「大学入試改革」が、  
日本の教育・学校・学力・入試観を変える！

すでに4年後に迫った2020年から、昨今マスコミでも盛んに取り上げられるようになった「大学入試改革」が実施されます。現行の「大学入試センター試験」を軸にした大学入試制度とは大きく変わるものになるということは、すでに多くの保護者をご存知のことでしょう。

これまでの「大学入試センター試験」に代わって、新たに導入される「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」には、それぞれ、「高校段階で身に着けた基礎学力」と「大学に進学するために求められる学力」を測るための役割が課せられます。

そのうち後者では、「思考力・判断力・表現力」を問うために「記述式」の回答方式を中心とした、いわゆる“PISA型(=OECD学力調査テストで出題されるような)”の問題が想定されています。

これらのテストは、ともにPCやタブレット端末での入力(回答)による「CBT方式」を前提に開発され、採点にはAI(人工知能)のシステムが導入されるといわれています。

実際、導入の初年度にあたる2020年には、まだ現行の『学習指導要領』のもとで学んできた高校生が受験する形になるため、本格的な「新テスト」制度(システム)の完成は、高校では2022年度以降ともいわれています。その意味でも、このレポートの読者のご家庭のお子さんたちが、この変革の渦中にあることは間違いありません。

いずれにしても、そうした日本の教育の大きな変



2015年からグローバルクラスを開  
設した神田女子大学。英語の授業はすべて  
オンラインで実施されています。

### 2020年大学入試改革

そこで問われるのは「知識」だけではなく、

思考  
力

判断  
力

表現  
力

英語  
力

化の節目の時期に中学～高校に進学し、やがて大学入試に挑んでいく現在の小学生と保護者にとっては、これから「中学～高校の6年間でどのような教育を受け、どのような力を身に着けるのか」が、わが子の将来にとって、かつてないほど重要な選択となってきます。

そうした変化にいち早く柔軟に対応し、2020年からの大学入試改革で求められる「思考力・判断力・表現力」や、4技能のバランスのとれた高い英語力を育ててくれる、さらには大学を卒業して社会に出たときに求められる総合的な学力と人間力(たとえば共生・協働・協調できる力とコミュニケーション力)、ICTスキルや課題解決力など、いわゆる「21世紀型スキル」を育ててくれるのは、やはり私立中高一貫校だといえるでしょう。

### 今後の大学入試と社会で求められる 「21世紀型スキル」とは？

「21世紀型スキル」の解釈はさまざまですが、ひとつは、世界の大手IT企業の主導のもとと教育関係者らが立ち上げた国際団体「ATC21s」(The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills=21世紀型スキル効果測定プロジェクト)が提唱する概念がモデルとなっています。

つまり、これからのグローバル社会を生き抜くために求められる一般的な能力(批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力、情報リテラシーなど)を指しているのです。

これは次代を担う人材が身に付けるべきスキルを規定したもので、各国政府も知識重視の伝統的な教育から21世紀型スキルを養い伸ばす教育への転換に取り組み始めています。